

元全国農業委員会女性協議会長 伊藤 恵子さん(72) ⑤

女性の登用 地道に要請活動

農家レストラン「はなやか亭」を開いた翌2002年、農業委員の活動の幅を広げる。宮城県内の女性農業委員の組織「みやぎアグリレディス21」を結成。04年に会長に就く。

アグリレディスをつくった時、県内の女性委員は12人、全体の1%でした。女性を増やすにしても研修会で勉強するにしても、ちゃんとした組織があった方がいい。県の指導もあって、それ、やりましょうという感じですね。

2代目の会長になり、市町村を回って、女性を農業委員に登用してほしいと首長や議会の議長に要請する活動を始めたんですが、まだ理解がなかったですね。ある農業委員会の会長さんに「男女共同参画って、女が外に出て、男が洗濯したり、食事を作ったりするんですか？」って言われた時は、みんなで「えっ」って顔を合わせました。「なに、おうちの母ちゃんもそうだし、女の人は細してればいいんでねすか」と言った首長さんもいた。やっぱり昔のまんまというか。地方では、その地域の伝統的な物事の決め方や風習があつて、だいたいが男性中心だから一朝一夕にはいかないわけです。地道に活動するうちに、それがだんだん変わってきてね。「おらほでも女性を出すからや」とか「恵子さん、女性増やすから」と言われるようになって



宮城県石巻市議会に農業委員への女性登用を要請する伊藤さん(左)＝2010年(宮城県農業会提供)

21年には、農業委員会を置かない女川町を除く34市町村で女性委員が誕生しました。アグリレディスでは、女性参画の促進や委員の資質の向上を図るため、研修会や懇談会、意見交換会なども開いています。「おうちの母ちゃんはずいぶん目立って」と言っていた男性が懇談会にご夫婦で参加し、奥さんが農業委員になることを認めてくれたこともあったんです。研修会などに夫婦2人でいらつしやるというんですけど、なかなかね。

農地行政を担う農業委員会、昔は名譽職みたいな面もありましたが、今は違います。農地をどう利用するかは地域農業の基本で、地域の将来に大きく関わるんです。基幹的農業従事者の4割を占める女性が参画し、地域の方針や政策にその声を反映させていかないと、女性が自分名義の農地を持つことも増えています。相続や贈与についても、女性農業者はやっぱり女性委員の方が相談しやすいですね。農業委員会の重宝業務は農地利用の最適化ですが、それだけでなく子どもたちの食育だったり、農業体験だったりできることはたくさんあると思います。

東日本大震災後に東京で開かれたシンポジウムで一緒に話した元千葉県知事の草木勝子さんに言われたことがあるんですよ。農業委員が100%女性になったら日本の農業が変わる。だから、変えなさいよってね。